後太閤記

六篇

九

特
へ伊13
1833
69

へ13 特
1833
69

繪本古國記六篇卷之九目録

加茂清正獅子山攻城話
森本儀太夫強勇乃國
木村大学元貞が伏兵を破る國
清正勇力元貞を討ち取國
加茂清正折檻虎話
月國
加茂三保義勇悔恨話
明の香大受和軍の術に雅楽を焼國
加茂三保義勇流れを拯ごろう氏國

安南合戦之話

日図

小西行長書状洸惟敬話

日図

日本勢焼王城話

洸惟敬再和軍の陣中より来る図

朝鮮の商賈日本人に籠れて

王城の市より交易する図

日本勢王城を焼て金山浦より退く図

日本図記巻之九

加藤清正勢金山橋中城

加藤清正勢金山橋中城の両城を攻んとて旗下の

此時加藤を計略清正を金山橋中城の両城を攻んとて旗下の

勇士庄林市義左衛門義林隼人助義之等龍義寺又八郎義久等

の道兵を以て先に進ませ清正自ら二万余騎の軍兵を引率し

後に続て進発せり抑金山橋中城の城を元国むる橋

孫人鄭大夫人元高敵の背教第の軍兵を以て攻撃す

中にて接戦孫人安中の猛勢に自馬を軍門に近出し城兵し

敵し戦ひ日本の兵士数十人斬て落し弥いよいよ奮ひけるに

金山橋中城を護し後詰加藤与三九郎門橋中城の守る九鬼宗郎兵衛

門山内甚三郎等の陣を落さんと撃て戦ひ城戸を

真田義之
強弓大國
真田記六篇卷九

き切て生ける人数討朝鮮人多勢なれども
ども朝鮮人多勢なれども
きたれば両城とも今ハこらへ
難儀寄ぶる人の援兵探りもんで押寄り朝鮮人の後より
又寄手の寄手ハ城中より援の軍勢引ひかれ
討て出探合して敵ハ後より朝鮮人くるくる
ひけ対森本義弟流矢にたの
とんくいう小隼人我も負うけ
抑うけて援捨ぶ森本さても
ちらうと打ぶり一戦
合馬ようて切ぶ

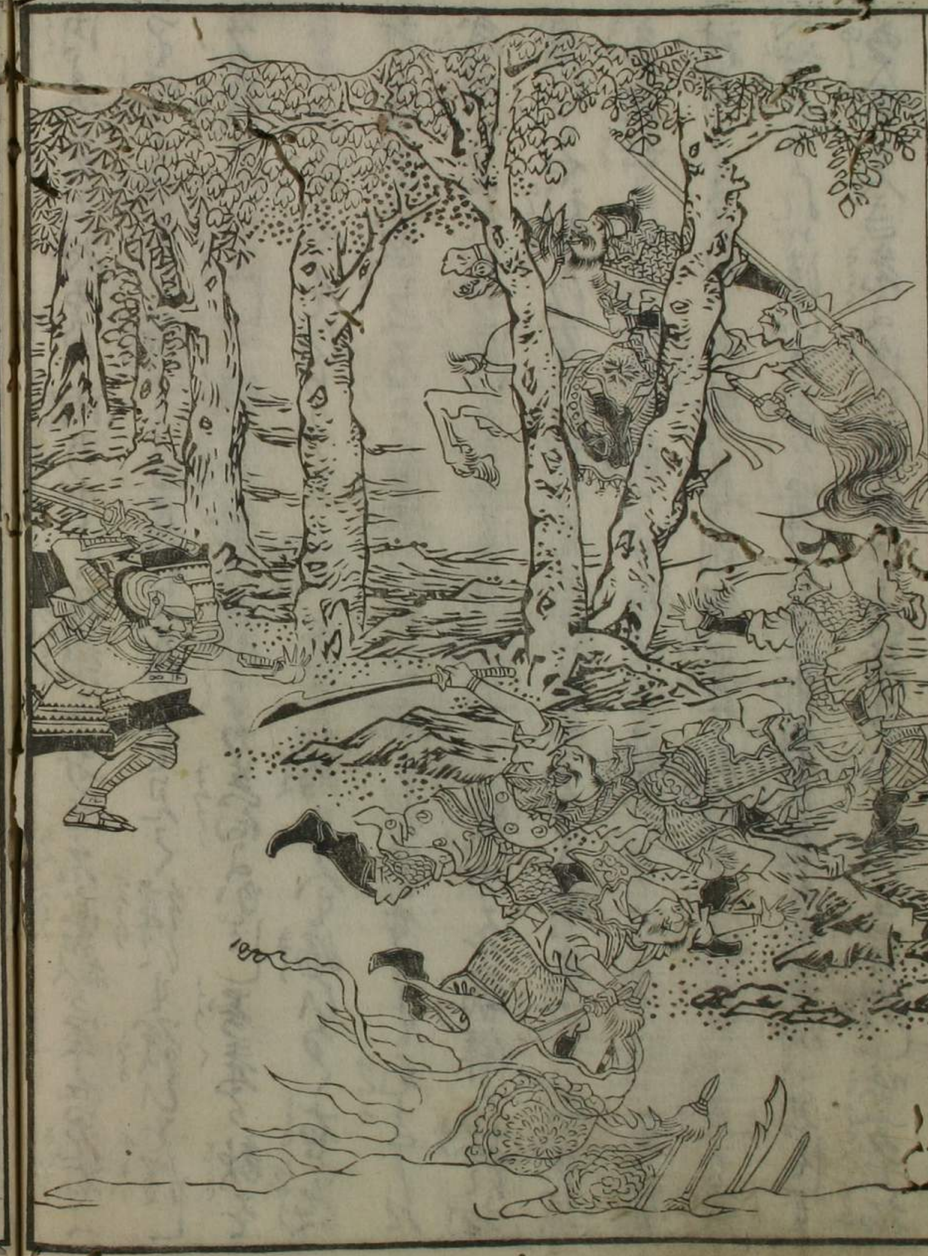
剣の若ぶる森本の槍の穂先
やうぶれが朝鮮国にても白
枕も日本勇を逞して朝
雑ぶ金山の囲ハ解ぶ寄
の毒薬ハ厳を付ぶ武場
と地中ハ埋ぶ軍勢を引て
を要ぶして朝鮮の兵
天井山内名称ハ清正の本
と仮ぶ朝鮮の大将元高
を切破ぶ春川
森本妙法蓮華経の大旗

赤村又兵
衛喜ぶ
伏兵と
破る図

押寄る元高麗人元来智勇無益なの大ねるれば幸よ向ひ合ひ
りの大ねこそ日本第一の勇ねかなる清正鬼ねの軍よ渠一人と討死
なるべしが日本の軍勢のごとくあて退くべき此所にて勝て休て
欲軍川まで渡さん所幸よ打出く清正と打破るべしこそ捨意緑人名
と勝と二つよりち川の傍の林の多ふ埋伏し息を休らて相待け
る清正の先々木村又兵衛と馬のをく逆まきよ勝ち乗の
流り六人余りの拝ちなりよ左右へ六人余の柄をそろ右へ投げ先先
よ馬を躍せ彼方川地名の川端小河り左方と流れ色者よ
向ひの岩よて林木いや深く生繁り何様伏兵もあやうん気を
かれども大膽不敵の木村なれば朝鮮の伏兵何程のなや仕出
しべきを進め川中へうち入れば拙軍後て流る所て林の

内より矢を射るの雨ごとく攻戦を射て元高麗人が軍兵左右よ
り時と鳴ひて討てうる木村又兵衛と人く徒にも戦ひと惜し
る戦と一人言して彼一騎余りの拝ちなり敵を
ちの手ぬるそひらりくと打ちと毛を毛ちた
打ちと人らと忍ち一ちの無名の雨を進こ彼其中ちも毛ちた
武者とれしが打落て首を傍若無人の戦ふを朝鮮人按れば
遠しまを引ちたりにうり元高麗人先と見ちく二百余人の村を伏
うる岳を引上げ矢を放つの雨より無数しさも勇こ日本勢
村をまさしく牧場を捨朝鮮の軍兵得ちりこと切先を逆
べ討てうれが清正の勇名并ち大九郎飯田角兵衛名何ち先こも
み余ちべき先を進む朝鮮軍六時まくく内を実測味方を拒

信正
勇力
元豪
を
救
を
図
加藤
主計頭
埼玉妖怪蓮華


真鶴訓六篇巻六

三喰ひく敵を見て朝鮮の軍兵今の叶はじと思ひて逃げ行くを
うしろより森本義太夫藤林長人藤原長平龍造寺八郎兵衛山
地名播中地名の勝を合て七人又百人計不と引返すが此合戦を見て何
ぞや見遁すべき間を作り砂煙りをとげ槍を並べ突き合ひ朝鮮
人数後の敵を逢と思ひ斬倒さるる雑兵人数一人本陣へ切入清正目がけ討てく
れ其家人名も今の見と思ひ槍をとて猶しが程なりしが張弾
と延べくれ其家人名を宙に引さげ大地にがばと投うそれが加藤清正
さり乗て前に出さり其外捨猛孫人い井上九郎よ捕を討た
前一人又百勝間をなげ軍をまどろ日も西に傾きぬ三山の麓の陣
を布其数い敵陣より寄〳〵ろる

加藤清正鉄砲虎

其夜清正が陣の後の大山より一疋の大虎来り馬を宙に投げ柵の
上に出さり陣中見とがめ大きに騒ぎ弓鉄砲よとひ出さり
清正これを聞の合場きの敵と無と思ひ出さり左脇と云
小姓も虎来て喰殺せり清正弥驚り馬と乗〳〵と安〳〵と
〳〵敵のあひ人を多ふの我武名の和廉〳〵と敵のかの〳〵と明
る次より数千の軍兵山の上面より えまれく猪と鳴し鉄を打て狩
立るこの中よみる麻猿の鉄砲を放ひ虎の外よい月も
けびれと猿く探るが小姓仏生撃りする萱京より伴の虎遣
出り清正くと安より自鉄砲を二ツ五発迫り大なる岩のよう
登り遣よ人れが七人命りの虎懐り猛て飛来り其間十七人間

清正虎と打殺す図

よりて清正を白眼視して遂に加藤が近臣百人計鉄炮を揃へて打んとせしに清正ぐろ〳〵打ひらび自打殺さんとせしに鉄炮の神ひて光り照よりおんびゝさまとうろく彼猛虎忽冷毛と逆立て口を開き飛来る清正ぐ級川鉄炮遣ひ咽の内より迸ぬきしもの猛熱焔しなまじ例を伝へ紀よりんと身を揺めども急の痛みに堪て絶入其侍配しうろ狂もとくと将卑しども此の熱のこうして虎いつ人ぐ清正大よ鎖び被虎を陣羽織て荷ひ拾せ遍志摩ぐ城興北名の城へゆくとうり

加藤三條義勇惰衆降

大明の大軍正月廿六日の合戦より小早川隆家ぐ武勇より降うと城別名の地へ退しぐ大軍麦如松人名日本の武勇うや恐まうん渤軍勢と打排明朝より迫べきを度とぬ王城より日本の諸大名高遠うて大明の軍兵城より近く迫るくよ吳らび城別名へ押寄一夷より退崩さんと軍の評議より及びくれども流石て敵の大軍小勢の味方をんて抑よせ〳〵我んの先きをうてかゝんとく先南の評定より日とる也　此度より王城の西南より出つく大河なり川ぐらふ数十間の倉を建兵粮十余万石入置く日本人のち為こんより浮田秀家龍山城名こゝ不て陣営をつゝ秀吉倉数多の建させ間兵粮数万石殖へうぬ小明の大る番大受人名夜中より先小の兵粮倉に去のびう史をうけ〳〵焼尽ぬる小日本勢大よ力を失ひ日粮米尽くかり今の王城より尽く籠るべき中うりるく若や明の大軍押よせうとも基こ為戦も為まじ〳〵れが速より谷山浦地名へ

明香大受和軍の給ふ

粮米を焼く図

退き日本より運送の粮米を得て合戦を及びうんと心よまれ
論議をるゐ士を多くるる加藤遠江守三保の名地内其席をあり恐
れしてくくの評議せるれば西の諸侯小河ひてやうれる人清
正尚繁の両将の海く進んぐ歓地をあり此王城を陸河のみ里一里
を入事をうれ小王城食を[illegible]きくく加藤嶋志摩と捨殿登山浦
地名を退んとは其男の別時を図への不忠日本の恥
かくしびや人く軍勢を隠加藤嶋志摩の軍を助け日本の諸将
悉く集りて後進むとも退くくも無議を待せて次に[illegible]
浮田秀家若て是下の議論程を尚まうくも今既を食事う
浮田中納言殿と唱へく敬して[illegible]が今日より中納言殿
食うくいれを喰へよれの噛ようよ初りまじ清正尚繁を捨ろ
を国を摩とさら以人くを抜そんも安志と飽まく悪云吐ち
〜神とを出らまうれが義を勇む大将名を永設遠設峯九
流安嶋が軍いど清正を敗ぶ[illegible]して稀く軍勢を務へ[illegible]加藤三
保太を敗び敗て王城を出く西の方威逸道へ逃んくを以附を士卒
一人逃来り加藤を計以嶋志摩加藤守諸方の羅城を切崩り王城
を出り三十里を陣をえうり明日前到して諸将を対面をべき旨
若けまが遠江守と[illegible]も諸大将嶋を塔無坂して援の勢も止りうり遠江
守が清正を[illegible]と[illegible]を[illegible]食事を[illegible]心とせざるを実
勇あり義みをうくを人く偉り感ぐをう

安南合戦

加茂三保
義勇
衆ねと
怪し
図

王城を去る事数里ばかり安南府地名といふ所なる山陰
後ろ山間悲く深み流を辿りて源き沼と云南の方に錦江川名の大
河と呼び西の方は細き路のみ続きて開城府地名に続く要
害険阻の切なれば此山間に城を築き朝鮮の大将惟忠人名と
若二方計の勢と成り搦手に回り王城を奪ひ
日本勢と競ひ討んと計り日本の諸将議るかく安開
と食の乏と結ぶ者ども安南の城を責落し欲の絡へる兵粮を
奪ひ取やとつゝ程なく石田増田大谷等先に開城府地名の切なきを知さ
せんと加藤遠江守長谷川藤又郎本村常陸介を伴ひ彼二方余
人の兵士を率し安南城地名の地へ押よせる城の小の方曲づゝひに間
近く仕寄城中と論ずる小兵粮炊く煙りさゝ人なるさらに

実ぶさしい先行候を出し見せ申よと論ずる勢の内より奴衣の使
番物頭を差出し城中よりは日本勢殺害無と
見て酒を贈る小錦江の流を渡り陸へ出る小錦江の流を渡り陸へ
ざれば今い志と極り討死と覚悟して城中へ押しよせ彼物見の兵
卒数十人城外へ近く来る所を多く朝鮮人を石を投せ矢を放
ち日本の行候の兵をさんざんに切ひけば悲く負傷を逃げる
増田加藤が両勢一番に討て出る中西に傷を逃げる
本と側に絡る外曲論を乗を立て拠り小朝鮮人二の内に擬り
石撃掛り大木大石雨のごとく投落し毒箭と射る逃る日本
勢大中討と廓外へ引退く石田本村大谷が勢に入替て責戦
とつゝく城中防ぎ厳しくして更に寄入べきる御方く責うゞんで

安南合戦之図

又人馬を城内に撞標名二万余人の逆率と引受し城戸を開き二回の
鬨と揚出られば日本勢さんぐんよりも討ものさんれ又六里一里計逆うりる
城兵ろうくに引とげ城戸を固めて護りるるが日本勢叫ぶもとひ
ん再び喜声をのりあく鬨と揚して軍を拙さる王城として引を引
朝鮮の城中は敵再びよせるが防ぎなやべきかと皆落失度
してあるが日本勢の引引と見て大なる機を得えより不の要用い
能ふつう寄の尾傍彼不の切落て集り矢先を揃てさんぐんよ
射立られば日本勢寄すれも数多討を級を以加藤遠江守三隊
敵して鬨合せ〳〵且戦ひ且退き十日又里一里計引るるて王
城ろ援兵として加藤法印小西行長小早川隆景等二万又人の
道兵隊に〳〵押来れば朝鮮人甚驚る敵の計略よ落るゆう

ん引よりとなりつ〳〵進退よ暮れる我先よと逆行ひ
城中へもひれば〳〵てちひくよ落行くりのくりれば加藤小西甚
外の猛士悪く城中よ入く其敵を防れば城よ乗る兵へ
粮を王城へ運び入せ城よ火とうけ焼亡し勝閧と揚て退る

小西行長書簡況惟敬

此附大明の大将軍李如松名い日本の別勇と怪り敬て戦とこの
まび城別名を引た平壌名の軍勢と屯し日本勢も又敵の大軍と
偽りうとして押よせ合戦よりも及び十余万人の日本勢後続よ
王城よ在く日を送りぬうりるる程よ諸方の鮮盗賊のごく乱
王城より谷山浦名の紛来し自由ゆうびく兵粮尽られば細
河与八郎忠仲衆ねを進め番州名の城と責られども城の防ぎ

国にて援兵を請ひ給はんとし日数を送りて国勢ひ
軍を責給ふ不逞再び名護屋表へ軍進の旗きを上し援兵
を乞て戰を決し給へ」と衆議を定り書を作しむ此時石田
治部少輔三成双眼より涙をそそぐ流し此書日本の為
を図の御為に被為なるも再び援兵に出べき軍勢なく彼
を図の御心を苦しめるのこと某ども思を計るに大明と
和とをのく軍を抜き日本へ陣をとるより外なし計いみべきに
浅田秀吉公先に流惟敬を来りて和睦を計る日味方
敗北して平壌城の敗軍より彼軍に及ぶ彼小今日本より和を需ん
吾国の恥辱且いを図の御心に遠のき三成席を進んで
申るい何ぞやんぬる」く日本より和を需むべき先に小西行長

流惟敬人七ケ条の標目を示し大明皇と交引い和睦を計る
安どんび兵を挙て討ぜ」と約せり其一に両国の和議代々変
どもの第二に日本の城邑地を永く外とべきの第
三に朝鮮より日本へ質を入べきの第四に日を対ぐ
大明王とるべきの其外三ケ条い国家の秘とする所い
云ぐ」かくのごとくなる所いを図の御為暁に見るべし何ぞ我
朝の恥辱うんや大明の事如松人名に日本の武勇を耀き遠
く平壌城名に出て二度兵を出べる小西行長書簡を流惟
敬人名に送り先に約と背の条件を責員七ケ条の四約と為へ
罪と報じて平く恩賞とし」と申ば元来日本の武
威に恐て大明朝鮮既んで再び和議に及ぶ此の間いを

幻長
書と
慌惶
焼ら
図

附ハ命と限りて大明を切入んず是需めゞ〻く程の尚強ゆる
不之ゝ云加後を計ひ清正嘲笑ふく七ヶ条の拙き約大概大明ま
ゝ堂もとべきぶを国を明の大王ま封ぜんずいるる要人なりとも何で
是と承知もべき国隔り多記ゝべいぞせん自明国の帝王みて
呉国の人を明国の帝王ゝ〻めんとい狂人なゝべいざ知ゝべ人の知
みん者の諸人ぶ多れ、ま是四三成多て激ま実度の作のゞ作
ゝゝ人の心の四ゝ〻ぞるハ其の面の異なるゞゞとうや明帝いゝ
なる不ねのみゝを国と明王ま封どはじきめくもたゝゞ軍
ゝ〻ぞんば再び合戦ま及んまる細みまゞ先沉惟敬人名へ書を送
まて渠ゞ差んまも安せ給へゝゝ諸方る其
余乃士卒ゝ〻ゝ呉国の長陣ま徒労ゝ日い兵粮も潮迄

ゝ馬ゞも皆疲と病て記ゝれゞゝ和睦せんま考ゝみべゝゞこ
有ま三成ゞ言ま形ひめまゞ清正一人いゝふゝゝも詮方ゝ我
ゝ程毛唐人ゝゝに敷ゝれ再びゝゝき級ゝゝ及んまを敬くのゝ
ゝて疲を立て退ゝれゞ敬て小西行長侍玄蘇と右て天膳と
遇ゝゝ沉惟敬人名ゞ方へ遣ゝ使ゝゝ三成ゞ源ゝ謀略の
みゝゝゝ後ゝ数条を讀てゝれと知ゝゞ

日本勢焼王城

平壌地名ゝ城中此時さまゞゝの浸法とひふゝ日本の大将加
藤清正いまゞ咸鏡道八道・咸興地名より陽徳地名豆山地名と城て平壌
地名を襲ひ来るよいひ高ま軍乗ととゝ人とひめゝゝゝ大将
如水人名甚ゝに怒ゝゝて軍勢を退んと彼ゝ志ゝ

況
惟敬
再び和軍り
渡海して
来る國
真顕雲八幡三七
真顕雲八幡篇卷九
十九

とば朝鮮の大ねの柳成龍人名と落しめ稍く体め進めく日本勢を討しめんと計るとも李如松人名い惟可のこうて外患をとれば又兵を進んともせざ心祇忙くとして楽まざ附る倭ねる長書と沉惟敬人名を送り誠うう李如松人名自筆と招きうるふうし例和と求むるの書をくれば大に歓び沉惟敬人名と急に招き和睦のうを挽引しむ朝鮮の軍ねを明元人名と止めてやけるい是必ず日本の仍の計略なるべ其前い先に沉惟敬人名和睦と約して其明年に肯うされば日本人歓きて拒き寄せ海を渡うさと工むなるべ沉惟敬人名大膽石歓の猛者うれば是と安て大に笑ひ我日本の陣中へ行るの小児の中に拉ぶべ文に法若の如く思ひ給に及ばくく絶に王城に来りて長に対面を此沉惟敬人名を忠性愛敬の貴人なる小行長に正の武士に

ばるべ石田三成い恐るべき侮の甚き希に是等の三人密謀をるいうるる謀計をう絶れ七ケ条の標目を悉く明の朝廷に告ゐて日本人朝鮮の三王に及びせ捕の軍兵を王城の軍兵釜山浦地名退ぶ事如松人名に大軍と引て明国に向るべと盟約既に定りるれども朝鮮の両王を送り向さんに明僧日本に渡海を固く求いどんぶ叫ぶ事と行長に押ひて容易く諾ぶ軍兵釜山浦地名に引退んい事行長の計ひなるべ諸ねの小港どれば永くの在陣惟に一人も向国の後を塞ぐべき皆是に同意して沉惟敬人名い懐名に向りて日本人の諸大ねの王城と退くるに定り名孤る小左衛門より日本人

朝鮮の高賈
日本人
婦
王
城の市
文易
図

[illegible]王城に在陣されし朝鮮の商賈農[illegible]ども立ちて家業と
勅ち日本の兵卒にて釁[illegible]むを名の者ども殺しく日本人
よりかをうされし惟田長盛公と恐と渠る若明兵と内應し吾
軍の引退べきろを塞ぎうば頻る味方の陣所を悉く追拂ん
ことれども多勢の農民蜂起し辛う奉ん行給へ斬捨んの
ち安うべ[illegible]も衆なる者と敵さんも先の石俊のもりへ計
ひ給へ諸将と裏ら評議をあれ給へ匹らはして更に一度
せどりしの小早川隆景の附属する鮮[illegible]も出さんば石田三成の
うれをと味で諸将の論議へみどく安せざる小何を眠て浮世を
うぐるや老功の長[illegible]の[illegible]と[illegible]れば隆景[illegible]
を諸将の議論何とも知[illegible]ぬ我等の何を論せん[illegible]不仁[illegible]

易のよに[illegible]明日味方[illegible]
[illegible]れば[illegible]西[illegible]の後[illegible]
[illegible]明[illegible]後を暴し喰止んと[illegible]
叶へべ[illegible]謀[illegible]
[illegible]計[illegible]衆議既に定[illegible]
集り寅の刻兵粮を仕ひ朱の色に諸大名の雑兵と
王城に[illegible]焼き[illegible]朝鮮[illegible]
勢其後に次第を乱彼[illegible]
柳成龍人日本勢の引退くと見て[illegible]
本勢と追討のるべ味方の陣[illegible]
[illegible]軍と[illegible]水陸より追討

日本勝
王城を
焼て
釜山浦へ
退く

[illegible]と[illegible]ふ[illegible]却て柳塚[illegible]人名を[illegible]して曰[illegible]師と追[illegible]日
本人甚[illegible]なし[illegible]て[illegible]べきや[illegible]て討来[illegible]が味方甚き級と[illegible]朝
鮮の両王子日本人のよ[illegible]捕まて彼[illegible]に在信[illegible]て追討せば両王子と
[illegible]王城の焼[illegible]て陣と[illegible]て扣[illegible]日本の
諸大将の歌の[illegible]追討[illegible]と彼[illegible]国[illegible]を[illegible]小城と捕へ
[illegible]と假けて籠居する朝鮮人恐[illegible]て城と捨て逃[illegible]が途中おも[illegible]
[illegible]朱海と心安く[illegible]掃軍勢とから其地の要害蔚山地名西は浦地名
登萊上[illegible]海上慈川上巨濟上[illegible]んどて陣営と結びて[illegible]海[illegible]
城と築[illegible]拓兵粮玉薬沢[illegible]て朝[illegible]
で其前[illegible]ケ所連編と陣[illegible]

續本古[illegible]記大成巻之九終